

森
鷗
外

高
瀨
舟



高瀬舟

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代
に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が
牢屋敷ろうやしきへ呼び出されて、そこで暇乞いとまがいをすることを許され
た。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻され
ることであつた。それを護送するのは、京都町奉行まちぶぎょうの配
下したにいる同心どうしんで、この同心は罪人の親類うちの中で、主立おもだつ
た一人いちにんを、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。
これは上かみへ通つた事ではないが、所謂大目いわゆるに見るのであ

つた黙許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、勿論もちろん重い科とがを犯したものと認められた人ではあるが、決して盗ぬすみをするために、人を殺し火を放つたと云うような、寧どうあく悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂こころえちがい心得違のため、想わぬ科を犯した人であつた。有り触れた例を挙げて見れば、当時相対死あいたいしと云つた情死を謀はかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男と云うような類たぐいである。

そう云う罪人を載せて、入相いりあいの鐘の鳴る頃に漕こぎ出さ

れた高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、
 東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった。この舟
 の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り
 合う。いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。護送
 の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親
 戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町
 奉行所の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上
 で、口書を読んだりする役人の夢にも窺うことの出来
 ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、種々の性質があるから、この時只

うるさいと思つて、耳を掩おほいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、又しみじみと人の哀あわれを身に引き受けて、役柄ゆえ気色けしきには見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙脆もろい同心が宰領して行くことになる、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌きらわれていた。

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯しらかわらくおうが政柄せいへいを執とつていた寛政の頃でもあつただらう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕ゆうべに、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助きすけと云つて、三十歳ばかりになる、住所不定ふじようの男である。固もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にも只一人で乗った。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乗り込んだ同心羽田はねだ

庄兵衛しようべえは、只喜助が弟殺しの罪人だと云うことだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋さんばしまで連れて来る間、この瘦肉やせじしの、色の蒼白あおじろい喜助の様子を見るに、いかにも神妙しんびように、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆さからわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装つて権勢ごんせいに媚こびる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見張っているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮方から風が歇やんで、空一面を蔽おほった薄い雲が、月の輪廓りんかくをかすませ、ようよう近寄ちかって来る夏の温さが、両岸の土からも、川床かわどこの土からも、靄もやになつて立ち昇あるかと思われれる夜であつた。下京しもぎょうの町を離れて、加茂川を横よぎつた頃からは、あたりがひっそりとして、只舳へびなに割ひかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許ゆるされているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従したがつて、光の増したり減へじたりする月を仰あいで、黙もくっている。その額は晴やかで、目には微かすかなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、若し役人に対する気兼ねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それにこの男はどうしたのだらう。遊

山船さんぶねにでも乗ったような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪い奴やつで、それをどんな行掛りになって殺したにせよ、人の情として好いい心持はせぬ筈はずである。この色の蒼い瘦男やせおとこが、その人の情と云うものが全く欠けている程の、世にも稀まれな悪人であろうか。どうもそうは思われぬ。ひよつと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褁つじつみの合ごわぬ言語ことばや挙動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考える程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらえ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思っているのか」

「はい」と云つてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣うらしく、居ずまいを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然間を発した動機を明して、役目を離れた応対を求め分疏をしなくてはならぬように感じ

た。そこでこう云った。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。実はな、己おれは先刻さつきからお前の島へ往ゆく心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまでこの舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろいろな身の上の人だつたが、どれもこれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに来て、一しよに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くに極きまっていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはいないようだ。一体お前はどう思っているのだい」

喜助はにっこり笑つた。「御親切おっしに仰おやつて下すつて、

難有^{ありがと}うございます。なる程島へ往くということは、外の人には悲しい事でございます。その心持はわたくしにも思い遣つて見る事が出来ます。しかしそれは世間で樂をしていた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたような苦みは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上^{かみ}のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖^すむ所ではございません。わたくしはこれまで、どここと云つて自分のいて好^いい所と云うものがございませんでした。

こん度お上で島にいろと仰やっつて下さいます。そのいろと仰やる所に、落ち著ついていることが出来ますのが、先まず何よりも難ありがた有い事でございます。それにわたくしはこんなにかよわい体ではございますが、ついぞ病気をいたしましたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい為事しごとをしたつて、体を痛めるようなことはあるまいと存じます。それからこん度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴いたきました。それをここに持つております」こう云い掛けて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百銅を遣つかすと

云うのは、当時の掟おきてであつた。

喜助は語ことばを続ついだ。「お恥かしい事を申し上げなくて
はなりません。が、わたくしは今日こんにちまで二百文と云うお足あし
を、こうして懐ふところに入れて持っていたことはございませ
ぬ。どこかで為事に取り附きたいと思つて、為事を尋ね
て歩きました、それが見附かり次第、骨を惜まずに働
きました。そして貰もらつた錢は、いつも右から左へ人手に渡
さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食
べられる時は、わたくしの工面くめんの好いい時で、大抵は借
りたものを返して、又跡あとを借りたのでございます。それが

お牢に這入^{はい}ってからは、為事をせず^はに食べさせて戴きま
す。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない
事をいたしているようになりませぬ。それにお牢を出る
時に、この二百文を戴きましたのでございます。こうし
て相変らずお上の物を食べていて見ますれば、この二百
文はわたくしが使わずに持っていることが出来ます。お
足を自分の物にして持っている^はと云うことは、わたくし
に取っては、これが始^{はじめ}でございます。島へ往つて見ま
すまでは、どんな為事が出来るかわかりませんが、わた
くしはこの二百文を島とする為事の本手^{もと}にしよう^でと楽ん

でおります」こう云つて、喜助は口を噤つぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい」とは云つたが、聞く事毎ことごとに余り意表に出たので、これも暫く何も云うことが出来ずに、考え込んで黙っていた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつていて、もう女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きているので、家は七人暮しである。平生人へいせいには吝嗇りんしやくと云われる程の、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために著きるものの外、寝巻きまわしか拵こしらえぬ位くらいにしている。しかし不幸な事には、妻を好いい身代の商人の家から迎え

た。そこで女房は夫の貰う扶持米ふちまいで暮しを立てて行こうとする善意はあるが、裕ゆたかな家に可哀がられて育った癖があるので、夫が満足する程手元を引き締めて暮して行くことが出来ない。動やもすれば月末になって勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持って来て帳尻ちようじりを合わせる。それは夫が借財と云うものを毛虫のように嫌うからである。そう云う事は所詮夫に知れずにはいない。庄兵衛は五節句だと云っては、里方から物を貰い、子供の七五三の祝だと云っては、里方から子供に衣類を貰うのでさえ、心苦しく思っているのだから、暮し

の穴を填めて貰ったのに気が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るような事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に取り引き比べて見た。喜助は為事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一転して我身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰う扶持米を、右から左へ人手に渡して暮しているに過ぎぬではないか。彼と我との相

違は、謂わば十露盤そろばんの桁けたが違っているだけで、喜助の難有がる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

さて桁を違えて考えて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいるのに無理はない。その心持はこっちから察して遣ることが出来る。しかしかには桁を違えて考えて見ても、不思議なのは喜助の慾のないうこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で為事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさえすれば、骨を惜まずに働いて、ようよう口を糊のりす

ることの出来るだけで満足した。そこで牢に入^いってから
は、今まで得難かった食が、殆ど天から授けられるよう
に、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満
足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えて見ても、ここに彼と
我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の
扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにし
ても、大抵出納^{すいとう}が合っている。手一ぱいの生活である。然^{しか}
るにそこに満足を覚えたことは殆ど無い。常は幸^{さいわい}とも
不幸とも感ぜずに過している。しかし心の奥には、こう

して暮していて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようと言ふ疑懼ぎくが潜ひそんでいて、折々妻が里方から金を取り出して来て穴填あなうめをしたことなどがわかると、この疑懼ぎくが意識しきいの閾しきいの上に頭を擡もたげて来るのである。

一体この懸隔けんかくはどうして生じて来るだろう。只上辺うわべだけを見て、それは喜助には身に係累けいらいがないのに、こつちにはあるからだと言つてしまえばそれまでである。しかしそれは淌うそである。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のような心持にはなられそうにない。こ

の根柢こんていはもつと深い処にあるようだと、庄兵衛は思った。庄兵衛は只漠然ぼくぜんと、人の一生というような事を思つて見た。人は身に病やまいがあると、この病がなかつたらと思ふ。その日その日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。万一の時に備える蓄たくわえがないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がもつと多かつたらと思ふ。かくの如くに先から先へと考て見れば、人はどこまで往つて踏み止とまる事が出来るものやら分らない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気が附いた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目を漣みはつて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光ごうこうがさすように思った。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつ又、「喜助さん」と呼び掛けた。今度は「さん」と云ったが、これは十分の意識を以てもつ称呼を改めたわけではない。その声が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衛はこの称呼の不穏当なの

に気が附いたが、今さら既に出た詞ことばを取り返すことも出来なかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、おそるおそる庄兵衛の気色うかがを覗のぞつた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらえて云つた。「色々の事を聞くようだが、お前が今度島へ遣つかられるのは、人をおやめたからだ」と云う事だ。己ついでに序ついでにそのわけを話して聞せてくれぬか」

喜助はひどく恐れ入った様子で、「かしこまりました」と云つて、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違で、

恐ろしい事をいたしましたして、なんとも申し上げようがございませぬ。跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親ふたおやが時疫じえきで亡くなりましたして、弟と二人跡に残りました。初はじめは丁度軒下に生れた狗いぬの子にふびんを掛けるように町内の人達がお恵めぐみ下さいますので、近所中の走使はしりづかいなどをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。次第に大きくなりましたして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないようにいたして、一しよにいて、助け合つて働きま

した。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一しよに、西陣にしじんの織場おりばに這入りまして、空引そらびきと云うことをいたすことになりました。そのうち弟が病気で働けなくなつたのでございます。その頃わたくし共は北山の掘立ほったて小屋同様の所に寝起ねおきをいたして、紙屋川かみやがわの橋を渡つて織場へ通つておりましたが、わたくしが暮れてから、食物などを買って帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人で稼かせがせては濟まない濟まないと申しておりました。或る日いつものように何心なく歸つて見ますと、弟は布団ふとんの上に突つ伏していまして、周囲まわりは血だらけなので

ございます。わたくしはびっくりいたして、手に持って
いた竹の皮包や何かを、そこへおっぽり出して、傍そばへ往
つて『どうしたどうした』と申しました。すると弟は真蒼まっさお
な顔の、両方の頬ほおから腮あごへ掛けて血に染つたのを挙げて、
わたくしを見ましたが、物を言うことが出来ませぬ。息
をいたす度に、創口きずぐちでひゅうひゅうと云う音がいたすだ
けでございます。わたくしにはどうも様子がわかりませ
んのので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と云つ
て、傍へ寄ろうといたすと、弟は右の手を床とこに衝ついて、
少し体を起しました。左の手はしっかり腮あごの下の所を押

えています。その指の間から黒血の固まりがはみ出しています。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるようにして口を利ききました。ようよう物が言えるようになっていたのでございます。『濟いまない。どうぞ堪忍してくれ。』

どうせなおりそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄あにきに樂たのがさせたいと思ったのだ。笛ふえを切ったら、すぐ死ぬるだろうと思ったが息がそこから漏れるだけで死ぬる。深く深くと思つて、力ちから一いっぱい押し込むと、横へすべつてしまった。刃やいばは翻ひれはしなかつたようだ。これを旨うまく抜ひいてくれたら己おれは死ぬるだろうと思つてい

る。物を言うのがせつなくって可いけない。どうぞ手を借かして抜いてくれ』と云うのでございませぬ。弟が左の手を弛ゆるめるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云おうにも、声が出ませんので、黙もって弟の喉のどの創くわを覗のぞいて見ますと、なんでも右の手に剃かみ刀そりを持って、横に笛を切ったが、それでは死に切れなかつたので、そのまま剃刀を、刳えぐるように深く突っ込んだものと見えます。柄えがやっと二寸ばかり創口から出ています。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はじつとわたくしを見詰めています。

わたくしはやつとの事で、『待っていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は怨めしうらそうな目附をいたしました。が、又左の手で喉をしつかり押えて、『医者がなんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と云うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持になって、只弟の顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と云って、さも怨めしうらそうにわたくしを見ています。わたくしの頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる廻っているようでございま

したが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それにその目の怨めしそうなのが段々険しくなって来て、とうとう敵かたきの顔をでも睨にらむような、憎々しい目になっています。います。それを見ていて、わたくしはとうとう、これは弟の言った通にして遣らなくてはならないと思いましたが。わたくしは『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変って、晴やかに、さも嬉うれしそうになりました。わたくしはなんでも一と思にしないで思ってしまった。弟は衝ひざいていた右の手を放して、今まで喉

を押えていた手の肘ひじを床とこに衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかりと握って、ずっと引きました。この時わたくしの内から締めて置いた表口の戸をあけて、近所の婆ばあさんが這入って来ました。留守の間ま、弟に菓を飲ませたり何かしてくるのように、わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。もうだいぶ内の中かが暗くなっていましたから、わたくしには婆あさんがどれだけの事を見たのだからわかりませんが、婆あさんはあつと云ったきり、表口をあけ放しにして置いて駆け出してしまいました。わたくしは剃刀を抜く時、

手早く抜こう、真直に抜こうと云うだけの用心はいたしました。が、どうも抜いた時の手応てごたえは、今まで切れていなかった所を切ったように思われました。刃が外の方へ向いていましたから、外の方が切れたのでございましょう。わたくしは剃刀を握ったまま、婆あさんの這入って来て又駆け出して行ったのを、ぼんやりして見ておりました。婆あさんが行ってしまってから、気が附いて弟を見ますと、弟はもう息が切れておりました。創口からは大そうな血が出ておりました。それから年寄衆がお出いでになつて、役場へ連れて行かれますまで、わたくしは剃刀を傍に置

いて、目を半分あいたまま死んでいる弟の顔を見詰めていたのでございます」

少し俯向き加減うつむになって庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう云ってしまつて視線を膝の上に落した。

喜助の話は好く条理が立っている。殆ど条理が立ち過ぎていると云つても好い位である。これは半年程の間、当時の事を幾度いくたびも思い浮べて見たのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるその度毎に、注意に注意を加えて浚さらって見させられたのとのためである。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果して弟殺しと云うものだろうか、人殺しと云うものだろうかと云う疑うたがひが、話を半分聞いた時から起つて来て、聞いてしまつても、その疑を解くことが出来なかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと云つた。それを抜いて遣つて死なせたのだ、殺したのだとは云われる。しかしそのままにして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐えなかつたからである。喜助はその苦を見て

いるに忍びなかった。苦から救って遣ろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思つと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中うちには、いろいろに考えて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云う念、オオトリテエに従う外ないと云う念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑ふに落ちぬものが残っているので、なんだかお奉行様に聞いて見

たくてならなかった。

次第に更ふけて行く朧おぼろ夜よに、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面おもてをすべって行った。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館